

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書】

都道府県名	長野県
-------	-----

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	長野市立犀陵中学校					
学 年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	6	6	6	3	21	38.5
生徒数	217	228	209	16	670	

研究の概要

1. 研究主題

感じ、考え、実践する生徒の育成

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

<p>・全学年・全教科</p> <p>「感じ、考え、実践する生徒の育成」が学力向上につながることを全教科で生徒の事実から明らかにする。テーマに迫るにあたって、「必要感」「プロセス」のキーワードで、授業改善に取り組む。</p>
--

(2) 年次ごとの計画

平成14年度	<p>テーマ</p> <p>「感じ、考え、実践する生徒の育成」</p> <p>- 「量的な学力」の定着と「質的な学力」の向上を求めて -</p> <p>研究の見通し（仮説）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 日々の授業の充実を図り、学習環境の整えや基本的な学習規律を大切にする。 ・ 「わかること」と「できること」を直結した授業展開を図る。 ・ 「教科の面白さ」を味わわせ、やる気を育て、学び方を身につける。 ・ TT指導、少人数学習指導などを取り入れ、理解の進度や個々のつまずきに応じる。 ・ 事象に感動し、課題を発見できる、意欲もてる教材の提示や場面の設定をする。 ・ 体験的な活動、問題解決的な学習や追究過程をなるべく取り入れる。 ・ 表現方法や発想のよさ、取り組みのよさなどを認め、誉める。 ・ 類推する、比較する、取捨選択する、関連づける、変換する、統合する等の視点を与えて、問題や課題・予想・価値・追究方法をもって、自己とのかかわりでまとめて、新たな問題を考えさせる。 <p>研究の内容・方法</p> <p>本校生徒の身につけたい学力を、感じる力、考える力、実践する力とし、それを受けて各教科の特性や生徒の実態に応じて、各教科が教科指導の中で身につけたい学力を設定し、その学力をつけるための手だてを考え、授業改善を図った。</p>
--------	---

平成 15 年度	<p>テーマ 「感じ、考え、実践する生徒の育成」</p> <p>研究の見通し（仮説） 昨年度は、各教科で「感じ、考え、実践する生徒の育成」を目指して授業改善の方向を探った。以下のことが課題として残った。</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒は自分から問題を見つけ、問題を練り上げ、自分の課題をもって追究できていなかったのではないか。自分の問題をもち、課題をつかみ、学ぶ意欲を高めるための教材化と学習展開を図る。 生徒がかかわり合う中で、学んだことを分かち合えるようにする支援のあり方を探る。 学力向上につながる評価の方法、また、授業における評価と指導の一体化を具体化する。 <p>これらの課題をもとに、教師の指導観を問い直し「感じ、考え、実践する生徒の育成」を目指すことにした。指導観を問い直すことは、研究テーマをとらえ直すことでもある。生徒の学ぶ意欲が高まりにくいことを、教師の指導に問題があるという視点でとらえ直してみた。生徒に「感じる力」「考える力」をつけるという発想ではなく、生徒から「感じる」「考える」姿を引き出すことに重点を置くことにした。そこで、「必要感」と「プロセス」をテーマに迫るためのキーワードに据え、昨年度のサブテーマを外すことにした。</p> <p>研究の内容・方法</p> <p>「学びへの必要感」をもてるようにするために</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習対象（素材）を既習事項、既有的概念、経験と関係づける。 学習対象に五感を通してかかわり、からだに響く実感から問いやねがいをもち、学習対象の本質に迫れるようにする。 学んだよさを自覚・実感できるような生徒同士のかかわり合い、分かち合いができるようにする。（生徒と生徒、教師と生徒の緊密な関係） 学習に面白さ、興味を感じているが、課題がもてないでいる生徒には、具体的な追究方法を示し、主体的な課題把握ができるようにする。 <p>「プロセス」にかかわって</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒の学びのプロセスを明らかにして、個に応じた支援を考える。（評価と指導の一体化） 生徒の意識の流れが自然で必然性のある単元・授業展開（学びのプロセス）を構想する。
----------------	--

平成 16 年度	<p>テーマ 「感じ、考え、実践する生徒の育成」 - 必要感をもって学ぶ生徒をはぐくむ学校づくり -</p> <p>研究の見通し 「必要感」「プロセス」のキーワードを授業改善から、学校づくりへと広げる。学校のカリキュラム全体を見直し、学力向上を目指した学校づくりを推進する。</p> <p>研究の内容・方法 必修教科、選択教科、総合的な学習の時間、道徳、特別活動、学校行事、部活動など、学校教育活動全体にわたって、生徒が必要感をもって学ぶことができるようにすることが学力向上に結びつくと考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校づくりプロジェクトの編成 学校のカリキュラムの見直し それぞれの教育活動を有機的に結びつけるカリキュラムの作成 全教科の研究授業の継続と「必要感」を生み出すための事例分析
----------------	--

(3) 研究推進体制

- ・ 研究主任がフロンティアティーチャーを兼務
- ・ 正副研究主任，教科等主任会を中心に研究を進めている

平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

- ・ 「必要感」「プロセス」のキーワードを据えたため，全教科が共通の視点で授業改善を図ることができた。生徒が主体的な課題把握をできるようにするための教材化の工夫や学んだことを分かち合えるような授業づくりが増えた。
- ・ 総合的な学習の時間の公開授業では，必要感をもって学ぶ生徒の具体的な姿を見ることができた。生徒が学びをステップアップさせていくための支援のあり方が明らかになってきた。
- ・ 数学科，英語科は少人数学習に取り組み，生徒の実態に応じた教材化や学習展開を図ることができた。数学科では，「既習事項が想起しやすい単元展開」「操作活動」「自分の考えを発表したり友達の考えを聞いたりすることで自分の考えを深める」をすることで，生徒が必要感をもって取り組んでいけることがわかってきた。英語科では，教師の働きかけや，友の良さに触れさせることで，生徒の学びをステップアップできることがわかってきた。
- ・ 国語科では，年間を見通しての学習計画と評価計画を具体的に考え，指導形態やプリント等の補助教材を工夫し，説明文なら説明文として系統的・継続的に指導することが，「必要感」を高めていくことがわかってきた。
- ・ 全国学力標準検査（CRT）を2年連続で行った。今年度は分析結果がまだ出ていない。

2. 今後の課題

- ・ 「必要感」「プロセス」のキーワードを授業改善から，学校づくりへと広げる。学校のカリキュラム全体を見直し，学力向上を目指した学校づくりを推進する。
- ・ 学校づくりプロジェクトを立ち上げ，新しいカリキュラムの全体像を具体化する。学校の教育活動が有機的に結びつくカリキュラムをつくる。
- ・ 生徒の言葉や動きを教師がどう受け止めるか，また，教師の動きや言葉を生徒はどう受け止めているかを吟味し，発問の精選や生徒の学びを的確に評価することに努める。
- ・ 必要感をもって学ぶ生徒の具体的な姿と支援のあり方をさらに深める。

学力把握のための学校としての取組

- ・ 全国学力標準検査（CRT）を1月末に行い，基礎基本となる力を数値としてとらえるとともに，指導への活かし方を検討する。
- ・ 生徒に学校評価アンケートを行い（12月），授業をはじめとして，学校生活全般にわたっての生徒の意識をとらえる。

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- ・ 11月14日（金）フロンティアスクール研究発表会（2年国数英公開）
- ・ 11月28日（金）生活に根ざす信州総合生活科研究大会授業公開（3年総合）

- 【新規校・継続校】 14年度からの継続校 【学校規模】 16学級以上
【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導 【研究教科】 全教科（総合的な学習の時間を含む）
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有